“普通の国”を求める時代精神

表題と写真は『世界』1 月号に掲載された、ジャーナリストの斎藤貴男さんの論稿である。副題は「安保法制懇座長代理・北岡伸一氏をめぐって」とある。この副題に引かれて、興味深く読みすすんだ。写真右が北岡氏である。なお、この論稿は斎藤近刊『民意のつくられかた』岩波現代文庫の第 1 章「言論人が国策を先導するのか」にも収録されている。

“普通の国”を求める時代精神

安保法制懇座長代理・北岡伸一氏をめぐって

斎藤貴男

さいとうたかお　ジャーナリスト。一九五八年生まれ。著書に『私が「ケータイ」を持たない理由』（祥伝社）、『東京電力に研究し尽くされた原発』（講談社）、『青春校のカラクリ』（講談社）など。本論を収録した岩波現代文庫『民意のつくられかた』が二月一六日に小社より刊行予定。

安保法制懇の議論を実質的にリードした北岡伸一座長代理（右端）（2014年5月15日 写真提供：共同通信社）

SEKAI 2015.1

本レポートでも紹介した徳山善雄『安倍政権と新聞』集英社新書の 1 節から。「北岡氏は読売新聞の主要な社外筆者で、しばしば寄稿文を掲載するほか、同紙の単独インタビューを率先してうける。主にこの寄稿文と単独会見という 2 つの方法を通じて安保法制懇や集団的自衛権にかかわる情報が開示された。」ここには権力とメディアの一体化、既存の価値観を根底から覆す重大な政策転換の、世論操作による既成事実化などを読みとることができる。

北岡氏は 1987 年、「サントリー学芸賞」を受賞し、以来、専門分野にとらわれない評論活動を本格化させる。学者というよりは現実政治にお墨付きを与える役目としての活躍を目立たせていった経緯は、すこしあとに表舞台に躍り出た経済学の竹中平蔵氏の処世とも相似形をなしている。北岡氏は現在、国際大学の学長を務めている。国際大学というのは、経団連などの財界団体と有力企業約 900 社の支援で 1982 年に設立された、「財界大学院」の異名をとる日本初の大学院大学である。北岡氏には強力な後ろ盾がついている。

北岡氏は自民党幹事長時代の小沢一郎氏が 1993 年に発表して話題を呼んだ、『日本改造計画』の安全保障に関わる部分を執筆したといわれている。いわゆる「普通の国」という表現は、この小沢本によって広まり、やがて北岡氏自身も『「普通の国」へ』と題する書物を中央公論新社から 2000 年に出版する。北岡氏は読売新聞とともに、『中央公論』にもよく寄稿している。版元の中央公論新社は経営危機に陥り、読売新聞社の子会社になっている。

『中央公論』2014 年 6 月号に「憲法に固執して国家の安全を忘れるな―安保法制懇報告書の意義」、11 月号に「政府の向こうには世界がある―鎖国思考を脱するとき」を寄稿している。後者は朝日批判を展開した「メディアと国益」という特集の巻頭論文であり、斎藤論稿の最後にも詳しく紹介してある。

（2015年1月7日）